

## 高校生における時間的展望と達成動機の関係

### Research on a Relation of Time Perspective and Achievement Motive of High School Students

森 慶輔

(千葉県教育委員会スクールカウンセラー)

杉原 一昭

(東京成徳大学)

*Keisuke MORI* (School Counselor in Chiba Prefecture)

*Kazuaki SUGIHARA* (Tokyo Seitoku University)

#### 要 約

本研究は、高校生における時間的展望と達成動機の間を明らかにすることを目的として行われた。高校生411人を対象に調査が行われた。結果は、以下ようになった。(1) 高校生の時間的展望は「目標指向性」「現在の充実感」「過去受容」「希望」の4因子からなり、達成動機は「自己充実」「競争」の2因子からなる。(2) 目標、希望をもった高校生は、自己充実をめざす動機づけが高い。(3) 自分の過去を受容できていない高校生は、他者との競争に打ち勝とうとする動機づけが高い。これらの結果から、高校生への心理教育的支援、援助の方策が検討された。

キーワード：時間的展望、達成動機、高校生

#### 問 題

時間的展望 time perspective とは、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体 (Lewin,1951)」を指す概念であり、「個人の現在の事態や行動を現在や未来の事象と関係づけたり、意味づけたりする意識的な働き (白井,1997a)」をもつものとされる。つまり、ある個人の現在の状況や行動は、時間的展望の見地から解釈すると、過去や未来の事象と関連づけられたり、意味づけられたりするものであり、決して過去や未来から切り離され、独自に存在しているわけではない。

時間的展望は4つの側面からなるものとされる(白井, 前掲)。つまり、(1) 広がりや密度 (2) 時間的態度 (3) 時間指向性 (4) 狭義の時間知覚、である。広がりや密度は、どの程度、過去や未来を考慮しているかということである。時間的態度は、過去、現在、未来に対する肯定的または否定的態度のことである。時間指向性は、過去、現在、未来の重要性の順序づけのことである。狭義の時間知覚は、時間の流れる速さの知覚などのことである。

また、達成動機 achievement motive は、Murray,H.A. (1938) によると「難しいことを成し遂げること。障害を克服し、高い水準に達す

ること、他人と競争し、他者を凌ぐこと」と定義され、これを受け、林保（1969）は「困難なことをうまく成し遂げたい、競争事態で人より優れた業績をあげたいというような、いわゆる高い基準に対して自己の力を発揮し、障害に打ち克ち、できるだけよくその目標を成し遂げようとする動機または欲求」と定義している。しかし、堀野（1994）は、従来の他者との競争状態を前提にした達成動機の定義（堀野（前掲）は、これを「競争的達成動機 Competition」とした）を修正し、「自己充實的達成動機 Self-fullness」という新しい概念を提示した。これは社会的文化的基準に関係なく、個々人の充實を求める達成動機であり、人間の根源的な達成動機と考えられる。つまり、達成動機を「自己充實的達成動機」と従来の定義に従うものとしての「競争的達成動機」の2面から捉えているのである。

NHK放送世論研究所（1982）によると、10代後半の青年において、1955年から1980年にいたるまで、一貫して将来中心志向が減少し、現在中心志向が増加している。そして、これに対応するかのように、中学教育の現場でも（三上,1983）、高校教育の現場でも（山野,1989）、生徒の時間的展望（特に未来展望）の欠如や刹那主義的態度、つまり今がよければ、今が楽しければ、それでよいという態度が問題視されるようになった。また、中学生や高校生、大学生のスチューデントアパシー student apathy や無気力なども指摘されている（笠原,1988；山田,1990；深谷,1990；下山,1996など）。

白井（2001）は、現代の子どもの時間感覚が常に「今」であることを指摘し、今日のように時間を忘れることも、「今」に熱中することもできなくなったことが、時間的展望を獲得することを妨げていると指摘し、将来が見通せない状況では、ますますこのような傾向は強まっていくことが予想される、としている。つまり、現在のこれらの状況は、勝俣（1995）の「過去展望に対するフィー

ドバック機能も未来に対するフィードフォワード機能ももたないか弱く、瞬時的な現在展望の枠組みの中に制限される」という不適切な時間的展望モデルを多くの中学生、高校生がもっていることを示していると考えられる。そして、不適切な時間的展望をもつことが無気力やスチューデントアパシーなど、いわゆる「やる気のなさ」をもたらす要因の1つになっていると考えられる。

## 目 的

本研究の目的は、高校生における時間的展望と達成動機の間関係を明らかにし、これをもとに高校生の「やる気のなさ」に対する心理教育的支援、援助の方策を探ることである。時間的展望と達成動機の間関係を明らかにすることで、高等学校において、生徒の「やる気のなさ」に対する心理教育的支援、援助の方策について、具体的かつ有益な知見が得られるものと考えられる。

なお、本研究では広義の時間的展望のうち、「時間指向性」「時間的態度」の2側面を取り上げる。これは、時間的展望の広がりや密度、狭義の時間知覚より、過去、現在、未来に対する認知が達成動機と関係すると考えられるからである。また、達成動機を堀野（前掲）と同じく「自己充實的達成動機」「競争的達成動機」として捉える。

本研究の仮説は以下のとおりである。

- (1) 自己充實的達成動機と未来展望との間に正の相関が見られる。
- (2) 競争的達成動機と過去展望との間に負の相関が見られる。

## 方 法

### 1. 調査対象

東京都内の公立高等学校（全日制課程）に通う1年生から3年生のうち411名（男性201名、女性

187名、不明23名)を調査対象とした。調査は、2001年6～7月にかけて、主としてホームルームなどの時間を利用して実施された。

## 2. 調査項目の構成

調査には、学年や性別などを記入するフェイスシートのほかに、白井(1994)が作成した時間的展望体験尺度全18項目(「当てはまる」から「当てはまらない」までの5件法)、堀野・森(1991)が作成した達成動機測定尺度のうち、因子負荷量が.40未満の項目を削除した19項目(「とても当てはまる」から「全然当てはまらない」までの4件法)などから構成された質問紙が使用された。

## 結果

### 1. 時間的展望体験尺度および達成動機測定

#### 尺度の確認的因子分析

本研究で使用した時間的展望体験尺度、達成動機測定尺度は、大学生を被調査者に標準化がなされた尺度である。よって、高校生においても大学生と同様の因子構造となるかどうかを確認するため、確認的因子分析を行った。

時間的展望体験尺度は、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、4因子が抽出された。この結果、同様の因子構造であることが確認された(Table 1、2 参照)。

また、達成動機測定尺度は、IT相関がマイナスであった1項目を除外し、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、2因子が抽出された。この結果、各因子の項目数に変化はあるものの、同様の因子構造であることが確認された(Table 3、4 参照)。

### 2. 時間的展望4因子の性差、学年差

時間的展望の「目標指向性」「現在の充実感」「過去受容」「希望」の4因子で、性差、学年差が見られるかどうかを確認するため、2要因分散分

析を行った。しかし、交互作用は有意とは認められなかったため、性別についてt検定を、学年について1要因分散分析を行った。その結果、4因子とも性差は認められなかった。学年差については、「目標指向性」についてのみ1%水準で有意差が認められた( $F(2,384)=9.83, p<.01$ )。4因子の性別別、学年別の平均値はTable 5のとおりである。

### 3. 達成動機2因子の性差、学年差

達成動機の「自己充実」「競争」の2因子で、性差、学年差が見られるかどうかを確認するため、2要因分散分析を行った。しかし、交互作用は有意とは認められなかったため、性別についてt検定を、学年について1要因分散分析を行った。その結果、「競争」について性差が1%水準で認められた( $t(380)=3.72, p<.01$ )。学年差については認められなかった。2因子の性別別、学年別の平均値はTable 6のとおりである。

### 4. 過去、現在、未来はどう関係しあうのか

過去、現在、未来が互いにどう影響しあうのかを明らかにするため、「現在の充実感」「目標指向性」「希望」「過去受容」の各因子得点を用い、Pearsonの相関係数を算出した。この結果、「目標指向性」と「希望」の間、「現在の充実感」と「目標指向性」「希望」の間にそれぞれ中程度の正の相関が認められることが明らかとなった(Table 7 参照)。

### 5. 達成動機と時間的展望の関係

達成動機と時間的展望の関係を明らかにするため、達成動機2因子と時間的展望4因子との間で、各因子得点を用い、Pearsonの相関係数を算出した。その結果、「自己充実」に関して、「目標指向性」「希望」との間に中程度の正の相関が、「現在の充実感」「過去受容」との間に弱い正の相関が認められることが明らかとなった。また、「競

Table 1 時間的展望体験尺度の項目別記述統計量

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	
1 私にはだいたいの将来計画がある	3.40	1.21	1	5	①
2 将来のためを考えて今から準備していることがある	2.89	1.24	1	5	
3 私には将来の目標がある	3.60	1.29	1	5	
4 私の将来はばくぜんとしていて、つかみどころがない	3.17	1.75	1	5	
5 将来のことはあまり考えたくない	3.47	1.21	1	5	
6 私の将来には希望がもてる	3.22	1.04	1	5	②
7 10年後に自分がどうなっているのかよくわからない	2.24	1.12	1	5	
8 自分の将来は自分で切り開く自信がある	3.45	1.05	1	5	
9 私には未来がないような気がする	3.79	1.18	1	5	③
10 毎日の生活が充実している	3.34	1.17	1	5	
11 今の生活に満足している	3.13	1.23	1	5	
12 毎日、同じことをくりかえしているようで退屈だ	2.93	1.31	1	5	
13 毎日がなんとなく過ぎていく	2.61	1.30	1	5	
14 今の自分は本当の自分ではないような気がする	3.32	1.26	1	5	④
15 私は自分の過去を受け入れることができる	3.69	1.18	1	5	
16 過去の事はあまり思い出したくない	3.31	1.33	1	5	
17 私の過去はつらいことばかりだった	3.65	1.16	1	5	
18 私は過去の出来事にこだわっている	3.38	1.29	1	5	

注：①目標指向性 ②希望 ③現在の充実感 ④過去受容

Table 2 時間的展望体験尺度の因子別記述統計量

因子名	最小値	最大値	平均値	標準偏差
第1因子：目標指向性	5	25	16.37	4.91
第2因子：現在の充実感	5	25	15.38	4.67
第3因子：過去受容	4	20	14.04	3.62
第4因子：希望	4	20	12.68	3.02

争」に関しては、「過去受容」の間にも、弱い負の相関が認められることが明らかとなった（Table 8 参照）。

## 考 察

### 1. 高校生の時間的展望

今回の結果では、性差は見られなかった。また、学年差についても「目標志向性」についてのみ見られた。これは、時間的展望は性別に左右されるものではなく、個々人の生き方や価値観と強く関係することを示していると考えられる。また、学年差に関しても、同様のことがいえよう。

「目標指向性」の平均得点を比較すると、3年 > 1年 > 2年の順となった。これは、①3年生は、この時期（6月）には自分の進路についてある程度の方向性を見出しており、②1年生は、この時期はまだ入学した当初の意欲を保持している、からであると考えられる。一般に、高校2年は「中だるみ」の時期とされており、今回の結果もこれを支持するものである。目標指向性とは、自分にとっての目標、それもある程度具体的な目標を思い描くことである。現在の高校生の場合、中学卒業と高校入学、高校卒業と大学進学／専門学校進学／就職という人生の区切りがある程度はっきりと感じられるようになって、はじめて目標を定め

Table 3 達成動機測定尺度の項目別記述統計量

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
1 何でも手がけたことには最善を尽くしたい	3.12	0.71	1	4
2 いつも何か目標を持っていたい	3.01	0.83	1	4
3 みんなに喜んでもらえるような素晴らしいことをしたい	3.06	0.86	1	4
4 何か小さなことでも自分にしかできないことをしたいと思う	3.29	0.79	1	4
5 いろいろなことを学んで自分を深めたい	3.21	0.79	1	4
6 「こういうことがしたいなあ」と考えたりするとワクワクする	3.39	0.77	1	4
7 ちょっとした工夫をするのが好きだ	2.98	0.80	1	4
8 決められた仕事でも個性を生かしてやりたい	2.99	0.80	1	4
9 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	2.97	0.80	1	4
10 競争相手に負けるのはくやしい	3.23	0.83	1	4
11 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大切だと思う	3.01	0.83	1	4
12 どうしても私は人より優れていたいと思う	2.56	0.85	1	4
13 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う	2.44	0.95	1	4
14 他人と競争して勝つとうれしい	3.13	0.83	1	4
15 勉強や仕事を努力するのは、他人に負けないためだ	2.02	0.87	1	4
16 物事は他の人よりうまくやりたい	2.96	0.78	1	4
17 世の中に出て成功したいと強く願っている	2.99	0.86	1	4
18 成功するということは名誉や地位を得ることだと思う	2.11	0.90	1	4
19 進学する学校や就職する会社は、社会で高く評価されるところを選びたい	2.40	0.93	1	4

①

②

注：①自己充実 ②競争（除、11）

注2：11はIT相関がマイナスのため、分析からは除外

Table 4 達成動機測定尺度の因子別記述統計量

因子名	最小値	最大値	平均値	標準偏差
第1因子：自己充実	9	36	28.05	4.59
第2因子：競争	10	36	23.82	5.07

ようになるのだと考えられる。

## 2. 高校生の達成動機

従来の研究結果と同じく、今回の結果でも「競争」について性差が見られた。しかし、「自己充実」については性差は見られなかった。

これは、「自己充実」は、他者との比較ではなく、堀野（前掲）がいうところの「その人らしい個性的人間にまで発達する活力」であることによると考えられる。つまり、人が自分らしさを追及することが「自己充実」なのであり、これには男性、女性の差は存在し得ないということである。

それに対し「競争」は、平均得点をみると女性

＜男性となっている。これは従来の研究結果と同じであり、社会的要因、つまり競い合うことが要求される「社会ダーヴィニズム」の影響を示していると考えられる。しかし、平均得点の差はわずか1.68ポイントであり、高校生においては、男女共同参画社会の理念が浸透しつつあるとも考えられる。

## 3. 過去、現在、未来の関係

時間的展望は、前述したように過去、現在、未来からなるものであり、互いに影響を及ぼしあうものである。我々は、現在に生きているわけであるが、過去や未来とかかわりをもたずに生きてい

Table 5 時間的展望の性別別、学年別平均得点

	性別	人数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
目標指向性	男性	195	16.21	4.96	5	25
	女性	183	16.60	4.93	5	25
現在の充実感	男性	192	15.31	4.86	5	25
	女性	185	15.59	4.39	5	25
過去受容	男性	198	13.86	3.88	4	20
	女性	184	14.21	3.37	4	20
希望	男性	193	12.70	3.13	4	20
	女性	185	12.70	2.96	6	20

  

	学年	人数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
目標指向性	1年	156	16.05	4.73	5	25
	2年	104	15.08	5.14	5	25
	3年	127	17.81	4.60	5	25
現在の充実感	1年	156	15.29	4.68	5	25
	2年	102	15.45	4.69	5	25
	3年	128	15.42	4.67	5	25
過去受容	1年	155	14.21	3.41	4	20
	2年	103	13.52	3.81	4	20
	3年	133	14.24	3.69	4	20
希望	1年	154	12.92	3.03	4	20
	2年	101	12.31	2.91	5	18
	3年	132	12.68	3.09	6	20

注：目標指向性の多重比較結果＝1年<3年，2年<3年（共に1%水準で有意）

Table 6 達成動機の性別別、学年別平均得点

	性別	人数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
自己充実	男性	197	27.99	4.98	9	36
	女性	184	28.15	4.21	9	36
競争	男性	199	22.22	4.48	10	36
	女性	181	20.54	4.31	12	36

注：競争のt検定結果＝女性<男性（1%水準で有意）

	学年	人数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
自己充実	1年	153	27.45	5.17	11	36
	2年	104	28.10	4.01	10	36
	3年	133	28.71	4.21	12	36
競争	1年	155	23.83	5.01	9	36
	2年	103	23.70	4.87	13	36
	3年	131	23.92	5.32	9	36

Table 7 時間的展望 4 因子間の相関係数

	目標指向性	現在の充実感	過去受容	希望
目標指向性	1			
現在の充実感	.281 **	1		
過去受容	.090	.259 **	1	
希望	.518 **	.392 **	.251 **	1

\*\* 1%水準で有意

Table 8 時間的展望×達成動機の相関係数

	目標指向性	現在の充実感	過去受容	希望
自己充実	.393 **	.213 **	.128 *	.278 **
競争	.018	-.084	-.148 **	.014

\*\* 1%水準で有意 \* 5%水準で有意

くことはできない。過去、未来についてどう認知するかということが現在の生活に大きな影響を及ぼすであろうことは誰の目にも明らかである。

Frankl, V.E. (1946) は、(過度でない) 希望をもち続けることの重要性を説いているが、Table 7 の結果も、現在の生活に充実感を感じるには、希望をもつこと、目標をもつことが重要であることを示唆していると考えられる。

また、トラウマなど、過去の出来事を受容できずに現在苦しんでいる人が少なからず存在しているが、過去の出来事を現在の生活の中でいかに受容していくか、ということも現在の生活に充実感を感じるには重要であると考えられる。

しかし本研究では、現在が未来(過去)に影響を及ぼすのか、未来(過去)が現在に影響を及ぼすのか、現在と未来(過去)は互いに影響を及ぼすのか、ということは明らかになっていない。この点を明らかにすることは、今後の課題である。

#### 4. 時間的展望と達成動機の関係

Table 8 の結果より、「自己充実」は未来と、「競争」は過去と関係があることが明らかとなった。つまり、未来に対する希望をもつこと、目標をもつことと、自分らしさを追い求める意欲をもつことに関係があり、過去を受容できないことと

他者との競争に打ち克ちたいという意欲を持つことに関係があるということである。

「自分のやりたいことをしたい」という高校生は多い。依然として中学校、高等学校で受験中心の教育が行われているという事実は否めないが、他人との競争ではなく、自分を高める、自己実現を求める声は確実に強くなっている。自己充実は、将来の自分に対する投資という側面をもつと考えられることから、こうした背景が前者の結果を生んだものと考えられる。

また、日本の学校教育では、中学校でも、高等学校でも競争を強いる、受験中心の教育が行われてきたという事実がある。そして、学業成績が中学段階以降、自己基準として機能するようになっていく(西田, 1976; 刈谷, 1986など)ことが指摘されている。

現在では、学校教育改革、例えば絶対評価の導入、入試制度の改革などが実施に移され、次第に浸透してきているが、受験中心の学校教育はまだ根強く残っている。義務教育段階での学業での失敗を高等学校で挽回したいという意識が後者の結果を生んだものと考えられる。

ただし、本研究は全日制普通科の高等学校に通う高校生を対象にしている。よって、専門学科や総合学科の高校生、同じ普通科でも学力水準の違

いによって結果は異なる可能性がある。この点を明らかにすることは、今後の課題である。

## 5. 高校生への心理教育的支援、援助の方策の方向性

1から4の考察を基に、高校生への心理教育的支援、援助の方向について、若干の考察を行う。

①高校生の「やる気のなさ」は、過去の出来事を受容できないでいること、未来に対して明るい展望をもつことができないことに起因していると考えられる。よって、高校生への心理教育的支援、援助の方向としては、過去受容を促し、未来展望をもてるようにすることである。これにより、達成動機づけが高まると思われる。

②キャリア発達の視点に立った進路指導をカリキュラムの中に取り入れることが重要である。自分が何をしたいのかということを真剣に考える場を創り出すこと、そのためには何をすべきなのかということを抽象的でなく具体的に提示していくこと、の2点を実行することが重要である。

③過去の出来事を受容できずに苦しんでいる高校生に対して、心理的ケアを行うことも重要である。そのためにも、中学校だけでなく高等学校にも、スクールカウンセラーを配置することが必要である。また、教職員に対する教育相談、カウンセリング能力開発のための短期、長期研修の充実も必要であろう。

## 引用文献

- Frankl, V.E. 1946 *Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager*. Wien : Verlag für Jugend und Volk. (池田香代子訳 2002 夜と霧 新版 みすず書房)
- 深谷昌志 1990 無気力化する子どもたち  
日本放送出版協会
- 林保 1969 社会的動機 前田嘉明編 講座心理学 5, 動機と情緒 東京大学出版会 Pp.57-81.
- 堀野緑 1994 達成動機の心理学的考察 風間書房

- 堀野緑・森和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315.
- 刈谷剛彦 1986 閉ざされた将来像—教育選抜の可視性と中学生の『自己選抜』— 教育社会学研究, 41, 95-109.
- 笠原嘉 1988 退却神経症—無気力、無関心、無快感の克服— 講談社
- 勝俣瑛史 1995 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要(人文科学), 44, 95-109.
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science : Selected theoretical papers*. New York : Harper and brothers. (猪股佐登留訳 1979 社会科学における場の理論(増補版) 誠信書房)
- 三上満 1983 思春期と非行問題 新日本出版社
- Murray, H.A. 1938 *Explorations in personality*. Oxford University Press. (外林大作訳 1961 パーソナリティ 誠信書房)
- 西田博文 1976 現代社会と青年期の神経 症的病理—とくに病像の時代的変遷を中心に— 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編 青年の精神病理 弘文堂 Pp.71-89.
- 下山晴彦 1996 スチューデントアパシー研究の展望 教育心理学研究, 44, 350-363.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 白井利明 1997a 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 白井利明 2001 <希望>の心理学—時間的展望をどうもつか 講談社
- 山田和夫 1990 現代青少年の病理—サブクリニカルな問題性格群— ころの健康, 5, 2-16.
- 山野晃 1989 高校生の生活意識—価値意識と将来について— 青年心理学研究, 3, 55-61.



# Research on a Relation of Time Perspective and Achievement Motive of High School Students

*Keisuke MORI* (School Counselor in Chiba Prefecture)

*Kazuaki SUGIHARA* (Tokyo Seitoku University)

## ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify a relationship between time perspective and achievement motive. Subjects are 411 high school students. The results are as follows. (1) Time perspective of high school students consists of 4 factors : goal-directedness, present self-fullness, acceptance of their own past and hopefulness. Achievement motive consists of self-fullness and competition. (2) The high school students who have higher goal-directedness and hopefulness have higher achievement motive of self-fullness. (3) The high school students who can't accept their own past have higher achievement motive of competition. According to these results, a plan to assist high school students at mental health and education is discussed.

KEYWORDS : time perspective, achievement motive, high school students